

まちづくりネットワークえひめ

舞 とうん

VOL 44



双海町 鯉寿庵

特 長寿社会 —真の豊かさを求めて—

集

私と地域のかかわり—生涯現役—

- もの言う歯車
- 部落の活性化はオアシス運動から
- クラブ活動を通して地域おこしを
- 朝日文楽について
- 新しい語り部への道（不恐老惨）

阪神大震災に思う…………… 愛媛県コミュニティ推進協議会会長／松友 孟 …………… 1

(特) 『長寿社会 一真の豊かさを求めてー』 (集)

私と地域のかかわりー生涯現役ー

も の 言 う 歯 車……………	岩城村／澤村 治子……………	2
部落の活性化はオアシス運動から……………	長浜町／山口 道男……………	4
クラブ活動を通して地域おこしを……………	肱川町／前田 武……………	6
朝 日 文 楽 に つ い て……………	三瓶町／清水 範雄……………	8
新しい語り部への道（不恐老惨）……………	城川町／西岡 圭造……………	10

論談ーまちづくりー

町づくりは人づくり……………	松山東雲女子大学助教授／塩崎 千枝子……………	12
----------------	-------------------------	----

キラリ光るまち

文化は風、そして感動……………	大分県直入町経済課商工観光係長／首藤 勝次……………	14
-----------------	----------------------------	----

ふれあい広場

リレーでちょっとーク（土居町・東予市から）……………		16
----------------------------	--	----

地域を生きる

国安和紙とともに……………	東予市／杉野 和吉……………	18
---------------	----------------	----

風おこしのちかい

えひめ地域づくり研究会議の少々早すぎる自叙伝 そのⅠ……………	守谷 和久……………	20
---------------------------------	------------	----

レポート

私のまちづくり元年……………	松山東雲短期大学／福田 倫子……………	22
----------------	---------------------	----

Information

媛のくにフラッシュ……………		23
----------------	--	----

〈松山市・北条市・河辺村・双海町・長浜町・城川町〉

財愛媛県まちづくり総合センター平成7年度事業計画……………		26
「全国まちづくり情報」について		

特集 “長寿社会

ー真の豊かさを求めてー”

今号のテーマ

私と地域のかかわり

ー生涯現役ー

二十一世紀の半ばまでに国民の四人に一人が高齢者という長寿社会が到来する。現在の日本の社会経済を支えている多くの人達が、その時代を高齢者として迎えることになる。

このような長寿社会を老若男女ともに喜び合える社会にするためには、一般的に論じられる公的助成だけでは不十分であり、大切なことは、“まちづくり”の視点で長寿社会を考え、地域人（地域に生き、地域をこよなく愛し、近隣の人々と触れ合い、地域を愛することに喜びと誇りを感じる人々）としての自分自身を見つめ直すことではないだろうか。

私達は、地域社会を考えると、その閉塞性のみを捉えるのではなく、人間の感性や豊かさを育む地域社会の意義を真剣に考えてみる必要があると思われる。

そこで、豊かな長寿社会のあり方を探るため、特集のメインテーマを「長寿社会ー真の豊かさを求めてー」とし、今月号ではサブテーマを「私と地域とのかかわりー生涯現役ー」として、地域の中で「地域人として」「いきいきと生きる高齢者の姿を追いながら、“求められる長寿社会”の姿を考えてみる」とします。

表紙の言葉

春を待つ双海町は、海岸通りだけではない。山を一気に登ると鰯寿庵に辿り着く。

見晴らしの良い山の上に、めだかがスイスイ。水槽だらけである。その中でも特別なのは、宇宙帰りのめだか。次々と卵を生み続ける。三世を増やしている。めだかが自然の中で育つようにと祈っています。

柳原 あや子



双海町 鰯寿庵

『阪神大震災に思う』

愛媛県コミュニティ推進協議会

会長 松友

たけし 孟

阪神大震災からはや数か月が過ぎた。地震直後の報道からは、これほどの被害がおきると誰が想像しただろうか。五四〇人以上の尊い命を奪い、日本の大動脈を切断した「魔の一瞬」。震度七という激震は、経験したことの無い者にとっては想像するのも困難である。自然の持つ猛威の前では、最先端の科学技術を駆使した現代の都市も、いかに脆弱なものか感じ入った方も多いことと思う。

私が連日の報道のなかで興味を抱いたのは地域の対応である。最初の直撃で情報網が寸断され、行政機能もほとんど麻痺した状況の下で、瓦礫に埋もれた人々を救助するのは、隣近所の者しかいなかった。日頃の近所付き合いで、何気無く交換されている生活情報（隣の家族構成は何人で、おばあさんはどこで寝ているといった情報）の大切さを、この時ほど思い知らされたことはなからう。また、その後の復興活動を見ても、顔も会わせなかったマンションの住人達が協力しあい、商店街では儲け度外視で近所に飲食をふ



るまう光景が見られ、現在でも数多くのボランティアが避難所などで活動しているのは、ご承知のとおりである。

このような災害の中では、コミュニティが持っている「生活を守る」という最も基本的な機能が問われ、或いは生み出されるのである。コミュニティとは心と物の安全保障機構であり、人間がその弱さを補完するために生み出した智慧ともいってよいだろう。

さて、私たちにとっても震災は他人事ではなく、そこから得られる教訓を謙虚に受け止め、今後の地域づくりに活かしていかなければならない。そして、その検討は、行政、地域、家庭などあらゆる場において、様々な角度から為されることになろう。

県が先ごろ発表した調査結果によると、隣近所とのつきあいが「あいさつを交わす程度」及び「つきあいはしていない」という世帯は二八・九%に及び、十二年前の同種の調査結果（二一・二%）と比較し、約八ポイント上昇している。

このことは、自主防災の前で、地域が持っていた機能が低下しているとも読み取ることが出来る。地域や血縁は確かにうるさく感じることもある。しかし、私たちは今一度、コミュニティの持つポジティブな機能を見つめ直す必要があるのではないだろうか。

最後に、震災で亡くなられた方々に心から哀悼の意を表するとともに、この大きな痛みを伴った教訓が、今後、最大限に活かされることを願ってやまない。



特集 社会集

真の豊かさを求めて
私と地域のかかわり 生涯現役

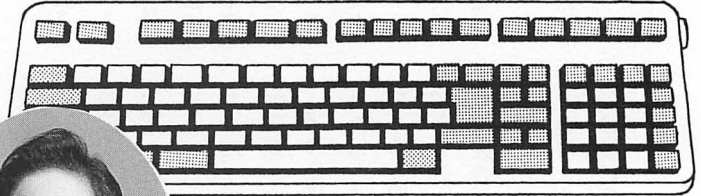
もの言う歯車

岩城村 澤村 治子

堀英彦さんの「銀の椅子」の一

説に「老人の座席をシルバースー
トと呼び、老人を銀にたとえるの
はまことに気が利いている。そう
じゃないか！ 金でも銅でもなく
銀というやつは、少しばかり磨く
のを怠れば、すぐにも黒くさびつ
いてしまふ」とある。私は折にあ
れこの一説を反すうし、「お前は
大丈夫か」と自分に問う。

ところで、わが家の無農薬野菜
の里芋・人参をいれた醤油ごはん



が出来た。ぬくぬくを
Tさんに食べてもらお
う。ひとり暮らしのT
さんは大喜びで受け取
って下さった。「大阪
で棟梁をしている息子
が来い来いと言う」と
話してくれた。「Tさ
ん、元気でずっとここ
に居ろうや」と私は心

底から言う。そのためには誰もが
やさしい心で、安心して、楽しく
暮らせる岩城村でなければならな
い。そこで、だんだん形が見えて
きた在宅複合施設「福祉の里いわ
ぎ（仮称）」の中味が問題だ。そ
して、そこに関わる職員、お世話
になる人、円滑に活用されるのを
支援するボランティア等のハート
が問題だ。人づくりは、道や橋を

造るように簡単にはいかない。で
も、まだお接待の心が残っている
やさしい岩城村なら大丈夫だ。私
はそんな岩城村が大好きだ。

二十年と二十六日間、右半身不
随であった姑をおくり、ぼっかり
あいた介護の時間を何かお役に立
てたい。そんな思いで「つくしの
会」をつくった。全く手探りの時、
今治市社会福祉協議会の扉を叩い
た。「まず一步を踏み出さない。
そうしたらボランティアが見えて
きますよ」「ボランティアを始め
たら、やめられなくなりますよ」
とも言われた。まさに、まさに、
その通りであった。

初仕事に大人用おむつ作りをし
た。昭和五十四年にはまだ大人の
おむつを見かけることも少なかっ
た。生名村の「海光園」で大きさを
教えてもらって作った。近所で
急に必要とする人が出来て喜んで
もらった。以来、多くの人々に支
えられ、励まされ、学び合って、「つ
くしの会」もおかげ様で十七歳に
なろうとしている。現在、三六名
の会員がそれぞれの形で活動に関

わっている。

○年二回、海光園での散髪奉仕。

○海光園での、車椅子散歩の介助。

散髪奉仕をする澤村さん

— いつも笑顔で —



○月一回、つくしの作業場での定
例会では、産業展やさくらまつり
のバザー用小物づくり。

○「ふれあい七夕まつり」

七月七日、社協と共催で、手づ
くり弁当の会食・レクリエーショ
ンに約六〇名のお年寄りをお招き
する。その時、小学一年生が歌を
うたいに来てくれる。「ささの葉
さーらさら」会場は大合唱となる。
帰りに子ども達がお年寄りの間を



みんなで小物づくり

剣なひと時。

そうこうする内に見えてきたものがあつた。それは、男性と共に活動すればより力強く前進できるのではないかということである。岩城村赤十字奉仕団は、つくしの会等のそうした思いをこめた呼びかけに応じた様々な人々の集まりで、小・中学校のJRC（青少年赤十字）と連携を密にし活動している。

また、独り住まいのお年寄りに給食サービス等を行っている「ふれあい友の会」では、構成メンバーである村内十一の女性団体の代表が隔月に定例会を持ち、今、岩城村の現状は？何が必要なのか？等環境・福祉に止まらず広範囲な学習をしている。この会も、三月で二十七回目の会合をもつことになった。

マニュアルのない問題に取り組むのは本当にしんどい。「ふれあい友の会」に参加した頃、何でも相談ができ、分かりあえる友が二人出現した。お互い独りでは何も

出来なかったと思う。励まし合える核があり、何かを推進する時には核を支える賛同者が有機的につながって行動すると、何かが変わることを強く実感することができた。

「お手玉遊びにいらつしやい」
— みんな楽しく —



安心して楽しく暮せる村づくり。それは住民みんなで取り組まなければならぬことだが、ともすれば誰かがやってくれるだろうと思いたくなる。そりゃあ、ついでにだけの方がよっぽど楽だから。

時計には大小様々な歯車があつてうまくかみ合っている。村づくりでは若者も年寄りもうまくかみ合って動きたい。そのためには、年寄りも若者も同じ土俵で語り合う努力をしなければならない。若者の新鮮な情熱に触れて、感動し反省し共鳴し、分からないことは教えてもらおう。そして、年寄りはだまっている歯車であつてはならない。「さあ、言おう」とさわやかに直言できる歯車でありたい。

若者は優秀なコンピューターの持ち主である。人間が多く困難を乗り越えて生きるために大切なことを、若者のコンピューターにインプットしておきたい。それが、生涯に一つでも役立つことがあればこの上ない喜びである。

かく言う私の持ち時間も確実に減って行くことを直視しよう。

通り軟らかい手で握手する。お年寄りの目から真珠の涙があふれ出る。うるわしい、優しい光景にじんとくる。

○「お手玉あそびにいらつしやい」

十一月三日、文化展の時、お年寄りの皆さんが「学校は、着物を着て、たもとへおじやみを入れて行きよつたんよ。そして廊下へみんなが座つて、こうやって…」と話ながら、小・中・高校生にお手玉あそびを教えて下さる。子ども達は目を輝かせて真似をする。真

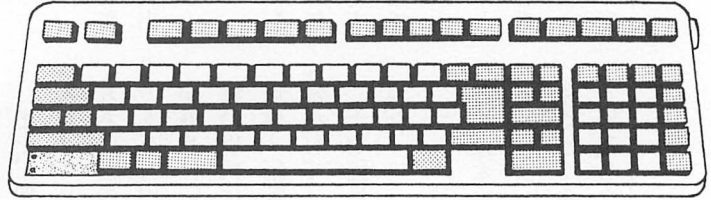
特集 長寿社会集

真の豊かさを求めて

私と地域のかかわり 生涯現役

部落の活性化は オアシス運動から

長浜町 山口道男



「おはようございます」と、今日も朝から明るい元気な子どもとの挨拶で一日が始まる。爽やかな気分になる。

私の住む大和地区は長浜町の中部、一級河川肱川の流域にあり、戸数四七〇戸、人口一六〇〇人、そのうち、大和小学校児童一三五人程度の静かで小さな山村であります。

長浜町には、この肱川を始め金山出石寺、そして、全国で例を見



オアシス看板前にて

いから、引き受けることにしまし

ない珍しいバスキュール式開閉橋があります。また、秋は紅葉や滝等の見物客で賑い、海の幸山の幸に恵まれております。

私が大和地区の区長としての任期を終えて、区長を辞める時、大和地区愛護班連絡協議会会長から「後任にぜひ」と推薦され、自分に務まるかどうかと考えた末、地域のために少しでも役立てればとの思

た。平成三年四月のことでありました。しかし、引き受けたものの、何をなすべきかしばらく考えました。

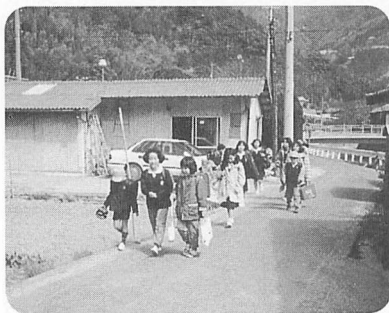
そんな時、私達の誇りである郷土を振り返って見ると、日常生活において繰り返す朝の挨拶が、大人も子どもも少し欠けているように思われました。そして、「そうだ、これからこの面において力を入れてみよう」と思い立ちました。

十五年程前、商用で大洲市のある山村へ行った時、集団で下校する児童とすれ違いました。その時、一人ひとりが「こんにちわ」「さようなら」と笑顔で挨拶して通り過ぎて行きました。予想もしない出来事だったので、こちらもあわてて返答しましたが、何とも言えない清々しい気分になり、その一日が愉快で気持ちの良い日になりました。

赤の他人、見知らぬ人に声をかけることは勇気がいり、なかなかできることはありません。学校の先生始め、保護者のご指導ぶりが伺われて感心するのみでありま

した。「そうだ、大和地区もこのようにしたいものだ」と思いました。普通、道ですれ違った時、知人であれば挨拶がすぐ出来ますが、一寸知らない人だと無視する傾向があります。その時会釈をするか、「こんにちわ」くらいの言葉で挨拶すれば、お互い気持ち通じ合い、今のようなどげとげしい世相が少しでも変わっていくのではないのでしょうか。

そこで、挨拶運動をこの地域に広げてみようと考えました。「オアシス」この言葉は、七、八年前に先輩から教えられたのですが、実際にこの運動に取り組むのは今回が初めてです。オアシス運動と



大和小学校より
下校する児童達



みんなで奉仕活動

は、

(オ) おはようございます

(ア) ありがとうございます

(シ) 失礼しました

(ス) すみません

という挨拶を実践しようというものです。

この四文字は、我々の日常生活において簡単に使われる言葉です。特に、「おはようございます」は大人も子どもも毎日使います。この言葉が自然に出てくるよう根気よく挨拶運動を展開すると共に、学校、保護者のみなさんにご協力をお願いすることにしました。

大和地区は、行政上七つの部落に分かれており、各々集会所があります。この集会所で、毎月、学校よりテーマを提起してもらい、校長先生始め諸先生方、保護者の皆さんが参加して問題を討議する、いわゆる地区別懇談会を実施しており、活発な意見を交換しながら、有意義な会を四年間続けています。

この会で、オアシス運動についてお話ししたところ、早速了承して頂きました。そして、場所を公民館に移し、まず、公民館よりコンパネ、ペンキ等必要品を購入してもらい、各部落独自の特性を活かした看板を造ってもらうことにしました。

母親と子どもが協力しながら、一生懸命作業している姿を見てみると、楽しくて、協力して頂くことへの感謝の気持ちで胸が一杯になりました。大体の出来上がり日程をお願いしていたので、予定通り、部落の特性を活かしたカラフルな看板が出来上がりました。

次は設置場所です。人通りの多いところ、皆の目につくところ、



ユニークなオアシス看板の一つ
全部お見せできないのが残念です

十字路付近等、部落の人とも相談して決めました。設置した時、通りがかりの人の反応はどうかと見ていたら、見慣れない看板を、皆さん立ち止まってじっと見ていたので、少しは役に立ったかなと嬉しく思いました。看板は七か所設置しましたが、風が強い場所があり、大工さんに協力して頂き、丈夫な看板を立てることが出来ました。様々な形で協力して頂いた皆さんに、深く感謝申し上げます。看板が立つて、今年で早三年。大分色あせてきました。その間、どうなるかと関心を持っていた挨拶も、最近は見違えるようにできるようになり、二〇m位離れていても、大きな声で言ってくれます。私も力強く返事をします。晴れやかな気持ちになります。子ども達も最近明るくなったと保護者に言われた時は、何とも言えない喜びがこみあげて来ました。どうか、この運動をずっと続けていって欲しいと願っています。

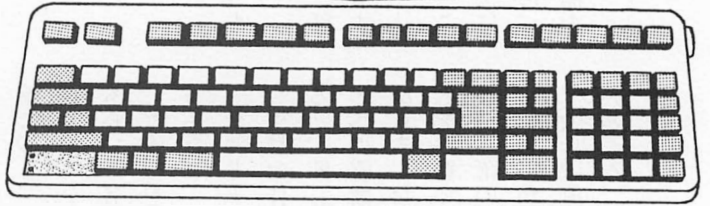
今、「長寿社会を迎えて、何をなすべきか」というテーマでよく論議がされ、福祉行政の大切さが訴えられておりますが、こんなオアシス運動のような些細な活動でも、真剣に取り組んで、町や村が明るくなれば、これ以上の喜びはないと思います。私も微力ながら、色々役を務めさせて頂いておりますが、健康の許す限り青少年育成に取り組む、明るい地域づくりを目指して、そして、やがて来る長寿社会をより豊かなものとするために、オアシス運動を始めとした地域活動が続けていき、地域のためにお役に立ちたいと思っております。

特集 長寿社会集

真の豊かさを求めて
私と地域のかかわり 生涯現役

クラブ活動を通して
地域おこしを

肱川町
大谷老人クラブ会長 前田 武



私は昭和六十年、六十五歳で老人クラブに入り、平成二年に八〇名程の小さな老人クラブの会長になりました。

当時、すべての団体にマンネリ化の傾向が見受けられ、どうにかして抜け出したいと常々思っていました。会長にして頂いたことを一つの契機として、何か新しいことを、また、何か変わったことを毎年やって、老人クラブの存在感を高めようと考えました。

にしました。早速、町の公民館長さんに相談に行きました。都合の良いことに、当時、県では花いっぱい運動を展開しておられたので、早速花の講習会を開いて頂きました。そして、花壇に使うブロックと土を現物支給して頂き、大谷の道路沿い九か所に、現在では十一か所の花壇が出来上がりました。

最初の一年は公民館より苗を頂き植えていましたが、二年目からは婦人部の皆さんが自ら苗をたて、

その頃、県の老人クラブ連合会で、婦人部を作って婦人部長を決めるように言われました。そこで、男性会員の二倍から三倍はおられます女性会員、即ち婦人部を始動させ、老人クラブの活性化につなげていこうと考えました。そして、まず身近なところから地域づくりに貢献していこう

移植をして花壇に植え替え、水・肥料をやり、草取りをして、きれいな花壇を作りました。花壇を作るにもなかなか苦労があり、県にご協力を頂くため、個人の畑を老人クラブが借り受ける契約をする等、花壇用地を確保して県へ計画書を出し、承認を受けました。その他、町にも協力を要請しましたし、また、部落の所有地は部落長さんに相談して使用させてもらう等、様々な問題を一つずつ解決しながら取り組んでいきました。

この様に、婦人部が活動することによって老人クラブが活性化さ



美しい花壇ができました!!

れ、また、地域の環境美化に役立つことで、やがては地域の活性化につながっていくのではないかと期待しています。そして、花壇づくりが皆さん、特に小学生に喜んで頂いたことを嬉しく思っています。

このような活動を展開していく内に、大谷の分館の皆さんや、PTA、婦人会、農協の女子職員の皆さん等も、花づくり活動に参加して頂くようになり、老人クラブが多少なりとも地域の活性化に役に立っていることを自負しております。



みんなで清掃奉仕

次に、これも私の念願でありま

した男性料理教室の開催についてですが、平成四年度当初、県老連より「生涯づくり推進事業」の一環として、男性料理教室とスポーツ普及事業の補助を頂くことになり、早速実施することにしました。

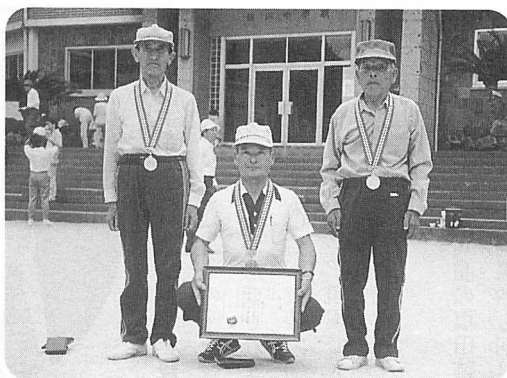
こうして、春と夏に一回ずつ、男性料理教室なるものを実施しました。この会は、男性が料理を作り、女性に試食してもらうという、要するに女性会員への感謝の気持ちを表す行事であります。

当日は、お祭りの時の様なご馳走を作り、女性会員をもてなし、



男性料理教室

クロッケー大会にて



中央が前田さん

大変喜んで頂きました。また、中でも一番喜んで頂いたことは、当日来られない約二〇名程の方々に「おすし」や「巻きようかん」等を送ってあげたことです。

一方、スポーツ普及事業については、クロッケーをやることにし、二、三名の人が参加してくれることになりました。練習は毎週二日とし、親善試合も計画して実施いたしました。そのかいありまして、毎年町内では優勝できるよう

になり、八幡浜教育事務所管内では三位以内、そして、県大会でも常連になる程の腕前になり、昨年は県大会で三位になることができました。あと一、二年すれば優勝できるところまで来たと、喜んでおります。

私は、初めに申し上げましたように、一年に一つは何か新しいことをやりたいと思い、取り組んで参りました。平成三年の花壇づくりから始まり、平成四年の学校解体イベントには、お隣の野村町の「辰本チビッコ舞踊団」をお招きして、地域の皆さんに無料ですばらしい踊りを見て頂きました。また、平成五年には、我々の菩提寺であります光明寺の位牌堂が老朽化したため、寺総代会や部落長と相談をしまして、檀家にも協力して頂いて、近郷近在にはない様な立派な位牌堂が出来上がりました。そして、昨年の敬老祝賀会には内子町の「岡田舞踊団」を招き、会員の皆様に大変喜んで頂きました。

この様な活動が出来ましたのも、

私にとっても時期が大変良く、補助即ち公的援助があったからだと思えます。それにも増して、クラブの会員や地域の皆さんが、私の意図する所を理解して下さり、様々な活動を協力しあいながら、地道に続けて頂いたお陰だと感謝しております。

我々老人クラブの真の活動方針が、「健康」「友愛」「奉仕」であるならば、すべて私達の住む地域を考えなくて成り立つものは一つもないと思います。人は皆、健康でありたいと願い、自らが生きていくことを決めたその地で、隣人を愛し、友を愛し、様々な人々と触れ合いながら、一生懸命に生きていきます。また、奉仕をすることによって、生まれ育った地域の恩恵に対し、少しでも恩を返すことが出来れば、人間として最高の幸せであると思えます。高齢者は確かに身体的には弱者であります。が、豊富な経験と健康な身体があれば、前述の様な活動を通して、地域づくりに貢献できるものと確信して筆を置きます。

特 長 寿 社 会 集

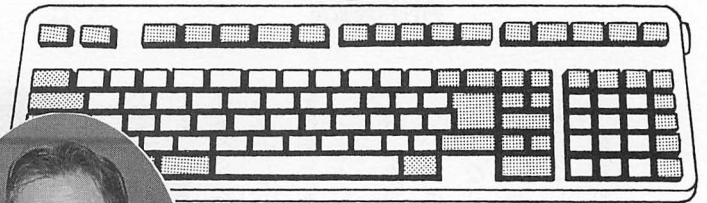
— 真の豊かさを求めて —

私と地域のかかわり — 生涯現役

愛媛県指定無形文化財

朝日文楽について

三瓶町 朝日文楽会長 清水範雄



を考え、練習を重ねて公開されるようになっていきました。
明治二十二年、東宇和郡山田に平六座がありました。資金困難のために売却することを知り、朝立浜地区の有志の人々の協力を得て平六座を購入、さら



先人が遺してくれた蔵書の数々

能を練る座が表裏一体となって文楽を伝承し、発表に貢献することになりました。

戦時中は、先人達が血のにじむ思いで遺してくれた数百点にのぼる伝統の宝物を、空襲で消失しては申し訳ないということで、各民家の土蔵を借り受け分散させて、長く風雪の中を生き抜いた朝日文楽保存のために尽力いたしました。

戦後、古典芸術尊重という風潮の中、三瓶町においても朝日文楽興隆の声が高まり、昭和二十一年、淡路の大江己之助氏の世話で豊田師匠を迎え、当時の青年団員達(約

五〇名)が開始することになりました。これは、今までの単純な芸から人形芸術の完成とまで言われた大阪文楽芸に移っていく一大転機と言うべきものでした。昭和二十四年頃には浄瑠璃の太夫も八幡浜・松山・別府からも来るようになり、毎年行っていた旧正月の公演も四日間連続の興行と変わり、一晚に八つもの芸題を上演して、朝日座は連日超満員の盛況でした。この文化財をいつまでも育成発展さす責務を感じる青年団のメンバーは、炎暑のときも、寒風吹きすさぶ中でも、三味の音に合わせて



三人の息がぴったり合っはじめて
人形は息を吹きこまれます

三瓶町は美しい自然と風土に恵まれ、その豊かな歴史と伝統により価値ある文化遺産が数多く継承されております。その一つに朝日文楽があります。

※朝日文楽の沿革

明治の初め、井上伊助という生れつき手先の器用な人が、松の瘤や桐の木で人形の頭を刻み胴を作り衣装を着せてまわしていました。その後、興味を持つ人が集まり、浄瑠璃に合わせて人形を操ること



観客の真剣なまなざしを受け
演技にも力が入ります

ります。

✧朝日文楽保存会発足

昭和三十六年には、指定された朝日文楽の人形の頭・衣装・道具一式を保存し、かつ演技の保存伝承により、芸能文化の発展に資することを目的として、町長を会長とする朝日文楽保存会が発足しました。

✧三瓶高校朝日文楽研究会発足

足拍子を踏んで練習に励んでいました。しかし、時代の波は古典的なものから近代的なものへと移り、朝日文楽も映画を上映して若者の心を引きつけるべく舞台はスクリーンへと変わり、文楽の公演は不可能となってしまいました。

✧愛媛県無形文化財指定

昭和三十四年、県の無形文化財に指定され、これを記念して毎年秋の愛媛芸能祭参加行事として、松山市民会館において文楽合同公演が開催されることになり、第一回大会より連続参加をいたしてお

念願としておりました文楽会館が建設され、人形の頭・衣装・道具一式等が収容されております。

✧文楽への思いを地域に託して

人形は三人で操るもので、一人は頭と右手、一人は左手、一人は足と、三人が心をつにいたした時、人形にも魂が入り、人間の様に全体で怒りや喜び、悲しみなどさまざまな感情を表し、客席を埋めた人々を魅了するものです。

練習に当たっては九十歳になる長老達を始め、六十歳後半の人達が後に続く世代に少しでも文楽の魅力を伝えたいと、熱心に指導に当たっています。会員も商店主・農家・役場職員・主婦とさまざまで、合わせて約三〇名が毎週一回練習に励んでいます。

平成五年に発足した小中学生による朝日文楽子どもクラブの指導にも当たり、今年の学習発表会では「傾城阿波の鳴門」を上演、また、老人ホームの慰問にも参加し、老人の皆さんにも非常に喜んでいただきました。

毎年各方面から多くの人達が視

察にみえられますが、平成五年三月には東京の財団法人時事画報の「フォト」に特集され、三瓶町の名を全国的にPRしていただきました。また、昨年は中国内蒙古海市の皆さんを始め、多数の人々が朝日文楽会館に来館され、大変嬉しく思っております。

このように、小学生から明治生まれの老人に至るまで、一体となつて、文楽を愛する心を通じて、三瓶町の新しい文化の振興に寄与できることを確信して、精進努力いたしております。



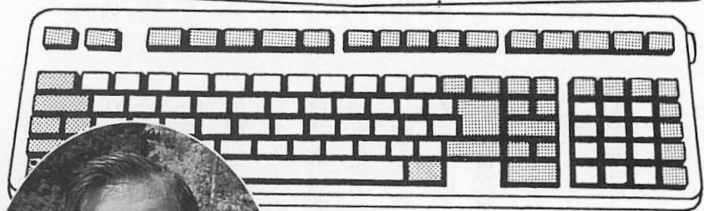
夜遅くまでの練習にも熱が入ります

特集 長寿社会集

真の豊かさを求めて
私と地域のかかわり ― 生涯現役 ―

新しい語り部への道 (不恐老惨)

城川町史談会 西岡圭造



造帯等、地質学上の宝庫であると共に、豊富な郷土資料と、そして地域に深く関わる多彩でユニークな観光・リゾート・文化施設等、町民が愛着と誇りを持てる町です。

(一) 古い歴史と新しい文化のとけあ

う町：城川

私たちの町城川は奥伊予の名のとおり東宇和の最東奥にあり、高知県梛原町と背中合わせの山村です。他町村と同様過疎と高齢化の波にあえいでいますが、先賢の高い見識と町民の努力で、県下でも一味ちがう特色を持つ町であると自負しています。大陸の移動とつながるアンモナイトや、黒瀬川構

(二) 次代に手渡したい誇り

忙しい毎日の生活に追われて過去や周囲を振り返るゆとりやの持ちにくい地域住民に、何としてもこの町の持つ良さや誇りを理解させるのが、先を歩く私達の責務と思っています。私達が先輩から引き継いだ労苦の結晶的資料の一つが、地域の郷土誌です。主なものや年代順に列挙しますと、土居村誌・市村敏麿翁の面影・魚

成千年史・高川郷土誌・県境の民俗・禹門山龍澤寺・土居郷土誌・城川町誌・遊子川郷土誌等があり、この中に書き留められた多くの記録から、町民の共通でミニマムな郷土理解の「キーワード」として、①禹門と尊公樹（銀杏）の影落とす城川、②勤王と義農を支えた城川、の二つが見えます。（勿論これではくくりきれませんが…）①は六百年の法灯を守る禹門山龍澤寺とそれに関わった人々の盛衰であり、もう一つは天正の戦国時代に土佐長曾我部の侵攻に落城した三滝城を中心にした町内の城々とそれをめぐる人々。②は幕末の動乱期に維新回天の大業に殉じた、九十九曲峠越えの土佐脱藩の若者達を包んだ城川、そしてもう一つは農民の生活を守るために犠牲を覚悟で立ち上がり、百姓一揆の、特に明治三年の野村・三間の両一揆を導いた義農と農民達…になると思います。

(三) 先達としての史談会の仕事

現在私達の史談会に籍を置く者

は二四名。四十歳～八十歳までの歴史好きの自由な自主団体で、過半数が六十五歳以上。「坂本龍馬の脱藩の道の研究」をきっかけに集まり、原則的には地域の夫々が持つ郷土史的理理解事項の交換と整理、資料の発掘と説明・保管くらいを目的にして、隔月毎の定例会での自由な話し合いでスタートしました。しかし、この頃は不定期の問題が起これば会を開き、個人やグループでの研究資料を全員に送り、情報の交換と深まりを意図する形で進んでいます。が、前述のように「次代に正しく確かに伝える」という大きな役割が自然発生的に関わってきました。そのような視点を軸にしての活動内容は次のとおりです。

① 検証・顕彰活動

先輩の残した記録の検証を重ね合わせながら、土佐脱藩の勤王の若者たちに物心両面の援助の手をさしのべ京都に送り出した熱血医師「矢野杏仙旧居跡碑」、南予十二万農民の権利回復闘争の代表と



「第10回 ふるさと街道を訪ねて」
旧跡めぐりをする皆さん

して無役地返還裁判を戦い、不遇の中に世を去った「市村敏麿生誕之地記念碑」の建立は共に完成。今準備中の「明治三年宇和島・吉田両藩農民一揆義農顕彰碑」・「ゆかりの地記念碑」と、九十九曲峠路を駆け降りてきた土佐の若者を休ませたり、情報交換等に家屋を使わせた「義侠の農民「福松」の居宅跡記念碑」は、新年度の予算で実施予定となっています。

②地域集会での積極的郷土史紹介活動

各地域での社会教育の集会や、

青年学級愛護班のふるさと探訪などで、基調となる話や説明・案内など、史談会ならではの役割が果たせています。

③子ども向けの郷土史跡・人物伝の編集発行

小学校高学年及び中学生を対象とした小冊子を予定し、内容は十項目構成とし、特徴的な史跡・人物を分かり易く読める様に配慮し、現在五項目は脱稿。後の五項目の完成を急いでいますが、年内には印刷製本化に取りかかれる様にしたいと努めています。

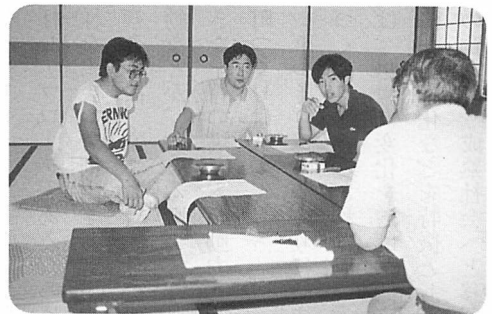
④古文書等読解整理作業の推進

現在、史談会内部での取組みの一番地道な努力が必要とされるものです。城川町教育委員会が旧遊子谷村庄屋、別宮家の古文書を預かっていましたが、一部は（故）桜井久治郎先生（県教委）等で読解されているものの、まだ読解に至っていない古文書が相当数あります。このうち興味深そうな二十余点を、野村高校の柚山俊夫教諭の

指導助言のもとで、読解作業を続けていましたが、今春予定の部分完了し印刷製本にまわした所です。近隣の町村にない貴重な村方資料であり、二百五十年前から文化・文政・天保を経て明治初期までの城川の農民達の生活ぶりが垣間見られる庄屋資料で、出来上がらない古文書が見つかったりして、その読解も進めねばなりません。また、それらの基調な資料をどういう形で整理・管理し、責任のある場所で一般に公開するかということも考える必要があります。

④城川町当局との好ましい関係

私達史談会は前述のように、先を歩く者の責務として、また、生き甲斐として、内部充実をはかり、新しい語り部としての道を歩き始めています。有り難いのは町当局が極めて好意的かつ積極的に私達史談会の活動を支えてくれることです。古文書等の管理・展示も町の責任で対応が進みます。自分達のささやかな活動への努力が受け



青年と語る会

とめられ、評価され、報われた気持ちと同時に、次への励みを感じています。史談会の目的遂行活動が、地域社会の何らかの役に立つなら、元気で動ける間、生涯現役も意義深い生き方です。ただ、残念なのは、正しい史観や、古文書読解能力の乏しい素人集団です。で、失敗や間違いも残しそうです。しかし、後に続く人達の手で誤りが訂正され、正しい資料に成長する一過程としてのお役に立つならば、「敢えて老惨を恐れざらんや！」の決意で活動を進めるつもりです。

「町づくりは人づくり」

松山東雲女子大学助教授

塩崎 千枝子

クオリティ・オブ・ライフ

町づくり論議が盛んである。経済的な豊かさを手に入れた今、本当の豊かさとは何か、私たちは改めて問い直し始めた。便利さや効率性と引き替えに私たちが失ってきてしまったものは何か。クオリティ・オブ・ライフを求めて、人々の関心が少しずつ、だが確実に自分中心から自分たちを取り巻く生活環境へと広がっている。

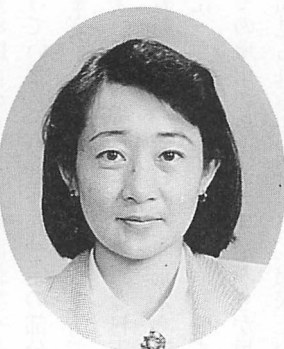
大きな町、小さな町、高速道路の走る町、田園のなかに佇む町、町それぞれに、姿、性格が違い、事情も抱える課題も違う。町づくりに「これだ」というひとつの模範解答はない。それぞれがそれぞれらしく、それなりに精一杯あるのが素敵だと思う。都市化を求めて、いつの間にか各地によく似た

「ミニ東京」のような町並みが増えてきたようで残念だが、町づくりにおいてはむしろ個性づくりが重要な基本的コンセプトであることは改めて言うまでもない。

としながらも、いずれの町づくりににも欠かせない共通の要件がある。人々の豊かな生活の実現には安らぎとゆとり、そして暖かい人間関係が不可欠である。さしずめわたしなら「緑あふれる町、そして人と人が出会える町」に住みたいと思う。現代社会はストレスがいっぱい。現代人にはかつての鎮守の森のような心を鎮ませる緑の空間が足りない。緑には人間社会に疲れた人の心を治癒する力がある。産業社会の進展と共に破壊が進んだ自然の回復を図ることも、現代人の心の健康を守ることに通じる。川床のコンクリートを剥して川藻とホタルを呼び戻した町がある。辻々に花を植えて花の町を実現した自治体、高速道路沿いに落葉樹を植えて緑深いグリーン

ベルトを実現した都会もある。自然のただあるを守るのではなく、自然を作り育てていく積極的な意識とそれを実現するための高度な知識や技術を抜きにしては、これからの町づくりを語ることはできないと思う。

次に、人間関係が希薄になった現在、町づくりには新たな人間関係を築くための積極的な仕掛けが是非とも必要である。多様な人々が出会うことにより、対話が生まれ、相互の理解と共通の課題意識が育つ。政治、経済、教育、福祉、文化、環境、道路等の基盤整備など、地域の抱えるさまざまな課題について異なる立場の人々が語り



合うことが本当の町づくりへの第一歩である。共生社会の基本は互いの違いを認め合いつつ助け合うことにあり、町には他者との出会いのあらゆる機会が用意されていることが望ましい。いろいろな立場の人々が集まって来れるような教育施設や福祉施設の複合化や総合整備、児童生徒のボランティア実習、山村留学や交換留学制度、世代間や異文化・異業種交流事業、ボランティア休暇制度、ボランティア活動のネットワーク化などハード、ソフト両面からの多様なアプローチがあるだろう。多様な出会いを創出する広場や公園、複合施設、文化教育・社会奉仕活動などが、次なる町づくりへの大きな学習の場とも原動力ともなる。

町づくりは人づくり

町づくりは人づくりに始まり人づくりに尽きると私は思う。社会は、急激に変化を遂げ、低成長経済や高齢化などを特徴とし、生活の質を問う成熟社会へと移行しつつ

つある。言わば成長を前提とした「パイの拡大」の時代から、限られたサイズのパイをいかに皆で公平に分けるかが問われる「パイの分配」の時代へと、生き方や価値観、行動様式の転換が求められている。そのためマニュアルもシナリオも用意されぬままに、新しい時代への対応が求められていると言える。

高齢者社会への対応や男女共同参画社会の形成、教育問題をはじめ、地球環境問題や国際理解といった世界的な課題など、私たちが社会生活を営む上で理解し、体得しておく必要のある課題が増大している。人間性豊かな生活を営むために私たちは、そして地域社会はどうしたらよいか。時代や地域の要請に応じた町とはどうあるべきか。皆で課題に取り組み、考え、判断し、答を探っていく時代の大きな転換期である。

そういう時代だからこそ、町づくりにおいては方法論よりもまず人が重要である。町づくりに住民がどう関わっていいのか。自分た

ちの町のことに皆がどれほど関心を持ち、主体的に考え、課題に取り組んでいけるのか、優れたリーダーがどれだけ育っているか、よき理解者、協力者がどれくらいいるかといった住民の意識、行動レベルが町づくりを決める。これからの町づくりは、まず住民の参加意識を高めることであり、そのための仕掛けを整えることであり、そして住民の主体的な参加により地域ニーズに答える実践を行っていくことである。

人間関係を築く場作り

しかし、住民の参加意欲を引き出していくのが今日の社会状況である。人間関係が希薄化し、地域社会の連帯が弱まっている。少子化、核家族化、都市化が進むに伴い伝統的な血縁や地縁が弱まり、現代の日本社会の中で人が異なる他者と出会う機会が極端に少なく、人間同士の関係性が薄まってしまった。その結果、人々には他者の存在が見えにくくなり、自分中心に物事を考える傾向が強まり、一方では人間関係につまずく人が増

加している。このことは家庭や地域の力を弱めるとともに、人々の他人や社会に対する無関心や無責任、思いやりの欠如、また反社会的行動をもたらし、いじめなどのさまざまな社会的問題を引き起こす原因ともなっている。

だが、人間社会は相互のかかわり合いなしでは存在しえない。また、人は常に自分と異なる他者から学ぶことによって成長する存在である。私たちは改めて自分の人生を互いの関係性の中に位置付け、より大きな社会への責任と役割を自覚する学習が必要になってきている。人々の出会いの場づくりを町づくりの第一歩としなければならぬ理由はここにある。町づくりは人づくり。そして人づくりはまず住民が互いに多様な相手の存在に気づき理解し合う作業から始めなければならない。

そもそも日本人は、伝統的に異質な他者との出会いに乏しく、また他者との関係が苦手である。しかし、日本的な同質主義や排他主義は国際社会では通用せず、優れ

たリーダーの芽を摘むことにもなる。また異質性を拒む保守性は時代の変化への対応を鈍らせる。目指す共生社会の実現のためには、異なる他者との出会いと対話が社会全体の重要な課題となつてこよう。出会いと対話が知恵を生み、町の活力を生む。互いの多様性を理解し、思いやりを育み、違いを認め合いつつ助け合う町が共生の町づくりの目指すところである。

町づくりの推進には、住民の主体的な参加と、優れたリーダーの存在、そして活動を支える優れた行政手腕が欠かせない。とくに、新しい時代を担う主体者として人々を動機付け、地域との関わりを通じて新たな人間関係を築いていくことは、町づくりの最優先課題であると同時にその最終目標でもある。豊かさへの町づくりとは、壊れてしまった大切な自然と人間関係を皆が力をあわせて回復していく課程を言うのではないだろうかとは私と考えている。

きらり光るまち

文化は風、そして感動

直入町の挑戦

直入町

首藤勝次

《地域の概要》

直入町は大分県の中央西南部に位置し、くじゅう連山の麓に広がる高原地帯で、標準標高は四五〇m。全戸のおよそ七割が農林業に従事している、典型的な農村地帯である。人口は約三、〇〇〇人で、全国の例にもれず過疎化、高齢化が進行している。

《挑戦のはじまり》

町に歴史的な挑戦を促したのは、昭和六十年、東京に本社を持つ花王（株）からの一通の手紙であった。当時、入浴剤「バブ」の製品開発に懸命だった同社は、炭酸泉の効能を入浴剤に取り入れようと全国の炭酸泉の調査研究を重ねていたが、その結果を知らせてくれた当時の報告書の中にこそ、直入

町の将来を占うキーワード「日本の一の炭酸泉」が証明されていたのである。

このことを地域づくりに活かしていくために、平成元年十一月、炭酸泉の医療効果を論じる場として「全国炭酸泉シンポジウム」を開催。全国各地から温泉療養を研究する四〇〇名の研究者が集まった。このシンポジウムは、地方か

らの情報発信という成果と共に、町に貴重な提言を与えてくれた。それは「炭酸泉というのは国内では珍しい特異な泉質であり、加えてその医療効果は高い。温泉療法の世界的先進地であるドイツの温泉地に活用ノウハウを学んだらどうか」というものであった。

《温泉文化との出会い》

シンポジウムの成功に勇気づけられた地域は訪問団を組織し、ドイツ大使館からの情報を頼りにドイツの代表的な温泉地バーデンバーデンや炭酸泉で有名なバートクロチンゲン、バートナウハイムを訪れた。団員は、温泉療養の歴史のすごさに圧倒される中で、重要なことがらに気づき始めていく。それは「日本の温泉地での滞在は一泊二日の観光的パターンが典型なのに、ヨーロッパの温泉地では癒しや安らぎを得るための長期保養型が主体となっている」ことであり、「その演出のために小さな温泉地でさえ、個性的な魅力づくりに努力していた」ことであった。異国の温泉地で触れた個性的な

文化。それを知ることによって直入町の一村一文化は「核」を得る。温泉地だからこそ構築できた独自の文化、そして将来育むことのできる誇り高き文化の創造というテーマが誕生するわけだ。

《一村一文化推進事業の展開》

平成三年の春、それまでにドイツ友好親善都市の誕生を実現させていた直入町は、毎年三名の若者をヨーロッパに派遣、人材交流の継続と異文化交流による地域の目覚めを期待していたが、さらなる展開と飛躍を求めて一村一文化推進事業の指定を大分県に希望し、採択される。テーマは「九州アルプスから世界が見える：直入町ドイツ温泉郷づくり」。日本一の炭酸泉を活かし、世界を意識できる独自の、魅力ある温泉文化を構築していきたいという夢と希望が込められている。

これを機に、第二次表敬訪問団の渡欧、ママさんコーラスグループのドイツ公演など、住民の意欲的な交流活動が展開される。また、町は、ドイツ語と英語を添えたサ



インボードの設置、温泉地づくり
に燃えた先人たちの足跡を綴った
写真集の発刊、そして、国際イベ
ント「西洋と日本の温泉文化フ
ォーラム」の実施など、新しい風
を受けて積極的に取り組んでいっ
た。このフォーラムを契機として、
平成五年度には、商工会が中心と
なり、ドイツ友好親善都市のバー
トクロチンゲン市の協力を得て、
貿易会社「ナークロ」を設立。直
入町のオリジナルラベルで化粧し
たドイツワイン、鳩時計、絵葉書
などが店先を飾っている。

《異文化との融合で独自の文化を》

直入町は、ヨーロッパが六百年
以上もかけて育んできた「温泉を
飲む文化」をこの町で花開かせる
ために飲泉場づくりに取り組み、
同時に温泉を飲むための、飲泉カ
ップを製作。また、温泉文化館を
建設し、ここに展示する長湯温泉
の歴史と資料の掘り起こし、そし
てドイツとの交流で生まれた融合
文化を集大成する。もうひとつが、
五周年を迎えるドイツ友好親善都
市との交流記念事業。すでに子ど

もたちの文通も始まっており、ホ
ームステイ交流も待ち望まれてい
る。地域は、この記念事業が未来
の国際人に印象的なイベントとな
ることを願って止まない。

《文化は風、そして感動》

よく、過疎のために伝統文化や
芸能を守るエネルギーがそぎ落と
され、後継者も育たないという話
を聞く。農村地帯の実体であるこ
とに違いはない。しかし、それは、
過疎化や高齢化という平面的原因
だけではないような気がする。た
とえば直入町が平成四年に挑戦し
た国際イベント。その夜の交流会
もちつきや神楽に感動したのは海
を渡ってきた友人たちだけではな
かった。演じた地元在住民にもか
つて見たこともないほどの輝きが
あったのだ。つまり、異文化に触
れて感動する人たちが目の前にい
たからこそ、自分たちも感動でき
たのである。

年一回、小さなお宮を舞台に神
楽や獅子舞を演じる。演じる側も
見る側も、もうここ何十年とお馴
染みの顔だ。演じる動作が非日常

的であるほかは、何の変哲もない。
昔、このハレの日はすべてが新鮮
で、見る側に異文化人がたくさん
いた。もちろん、逆の視点で見
ると演じる側だって異文化人だっ
たのである。異文化に接することか
ら身も心も燃え上がり、非日常的
な感動を与えてくれた。そして、
その余韻がエネルギーを生み、次
の日の日常を支えてくれていた
はずだ。しかし、今は非日常も
異文化もない。だから感動もない
のであって、だから新たなエネル



ドイツ温泉文化の風格が漂う飲泉場

ギーを生むこともなくなった。過
疎化や高齢化のほかに、こんな社
会環境、文化環境の欠落があった
ということ。地域はそのことを知
ったのである。

今地域は、新たな風を求めてド
イツとの交流に情熱を傾ける。す
でに八〇名の町民がヨーロッパの
土を踏んだ。人口わずか三、〇〇
〇人の、文字どおりの寒村にあっ
てこれだけ多くの町民が海外の風
に触れた。そして確実にその仲間
たちは増えていく。

文化は風。踏み固められ、身動
きでできなかった意識に新たな風を
送り込む。そこに感動が生まれる。
遠くを見据える力が養われる。一
村一文化推進事業はこれまでのよ
うな目の前の欲望をつかむことか
ら離れて、遠い先の地域とその住
人を意識させるエネルギーを育ん
でくれるものと確信する。そう確
信する。

田園風景の中、通学路にはドイ
ツ語のサインボードが父親の笑顔
のように暖かく子どもたちを見守
っている。

「故郷は遠きに
ありて思うもの」
とは良く言ったもので
す。

東京・横浜・西宮と夫の仕事
の都合で転々とした十年余り、良
きにつけ悪しきにつけ、一日とし
て我が町を思い出さない日はあり
ませんでした。我が町、土居町は、
北は瀬戸内海の燧灘に面し、南は
法皇山脈がそびえる人口一七、〇
〇〇人程の静かな田舎町です。美
味しい空気と美味しい水と温かい
人情が残っている町でもあります。
Ｕターンして間もなく二十年に
なりますが、春には数百mも干上
がる遠浅海岸で潮干狩りをし、夏
には海水浴、そして秋には山歩き

この頃 思うこと

土居町

鈴木千代子



と、恵まれた自然の中で子ども達
を育てることが出来たことを幸せ
に思います。子ども達の心の中
にも、しっかりと故郷が刻まれてい
ることが感じられます。
この二十年を振り返ってみます
と、若者達や地域の人達に支えら
れて、年毎に盛り上がる秋祭り一
つをみても、我が町は少しずつ確
実に元気になっています。
中でも女性達のなんとたくまし
くなったこと!!
週明けにはＪＡ婦人部の「ふれ
あい市」が立ち、週末には、生活
改善グループによる「タヤけ市」
が立ちます。自分の家の畑から、
取れたての野菜や果物、手作りの
赤飯やまんじゅう、佃煮、等々。
思い思いの自慢の品々が並び、私
達消費者を喜ばせてくれます。そ



ふれあい市

して、なんといつても「市」の最
大の魅力は、明るく元気なお母さ
ん達の笑顔にあると思えます。笑
顔のある所に人々が集まり、賑わ
っている気がします。

最近、仕事に興味にボランテ
ィアにと、社会参加の上手な女性
が多くなった様に思えます。

のんびり屋の私も、いつの間
に、あれやこれやと飛び回るよう
になりました。なかでも、町の食
生活改善推進員として、自分の地
域の集会所で栄養学級を開いてお
りますが、地域の人々の協力と理
解のおかげで、二〇名の学級生は
和気あいあいと集まっています。

メンバーは三十代から八十代まで
の幅広い年齢層ですが、若いも若
さも健康づくりのため、食生活を
見直し、手作り料理による薄味調
理に努め、運動や休養に関する知
識を学んでいます。

年々進む高齢化社会の中で、グ
ループ活動を通して、地域のお年
寄とふれあい、「健康づくり」、「生
きがいくくり」に取り組み、助け
合いの気持を持つ地域づくりに、
微力ですが貢献したいと考える今
日この頃です。



飯武栄養学級

剣で育む 心と身体

東予市 田辺重義

「コテ」「メーン」今日も子ども達の勇ましい掛け声が、道場に響き渡ります。私が剣道を稽古させて頂いているところは、東予市桑村の三嶋神社にある、愛媛建武館という道場です。この建武館は創立六十年という古い歴史を持ち、数多くの人々が育っております。私も、小学生の頃から指導を受けました。現在も、二代目館長、真鍋弘先生（教士七段）のもと、小学生三五名、中学生四三名、一般一一名が週四日、一生懸命汗を流しています。私自身、息子が二人とも（高一、中二）剣道を習っており、まさに剣道一家という感じですが、親子共通の話題も多く、



スキンシップに大いに役立っていると感じています。また、父親の威厳が失われつつあると言われる昨今、剣道のおかげで充分保たれていると確信しています。また、小さな子ども達とも触れ合うことができ、子ども好きの私にとって本当にありがたいことと思っています。皆それぞれ、体格も、顔たちも、性格も本当に多種多様で、見ていて非常に楽しくて仕方ありません。また、どの子ども、皆んなカワイイ子ども達ばかりです。剣道は礼節を重んじ、心身を鍛える素晴らしい武道であります。今は対外試合が非常に多く、どうしても勝負にこだわり、大切な心の鍛練を、とかく忘れがちです。



我々指導者は、剣の道という本来の目的を見つめ直し、子ども達を指導していくことが役目だと思います。しかし、対外試合により、子ども達同士の交流が増え、どんな友達との輪が広がっているのを見ると、現代っ子の素晴らしさところにも、感心している次第です。我々も、多くのことを、子ども達から教わることがあります。良い所は率直に認め、伸ばし、また、足りないところを、剣道を通じて導き、補っていけたらと思っております。私も昨年十一月に七段を頂き、それに相応しい人となるよう、努力、精進していかなくてはと、心しています。子ども達との触れ合いの中で、その成長に、少しでもお役に立つことができるよう、また、家庭ではできない、



大会で優勝の記念に 後列右から三番目

親子の会話、気持ちのつながりの橋渡しになれるよう、共に学んでいきたいと思っています。そして、少しでも多くの方々に、日本の伝統文化である剣道に慣れ親しんで頂き、良き、素晴らしきというものを、理解して頂けるよう、これからも頑張っていきたいと思っています。

「生涯現役」を目指して。

リレーで
ちょっと
トーク



✧国安和紙

皆さんは、「国安和紙」という言葉をご存じでしょうか。もし、知っている方がいるとすれば、その方は、大変な通であります。なぜなら、「国安和紙」とは、私のオリジナルブランド名であり、私の漉く和紙だけを「国安和紙」と呼んでいるからであります。

なぜ、「国安和紙」なのか。答えは簡単です。私の生まれ育ったところが「東予市国安」であり、私はこの「国安」が理屈抜きに大好きなのです。ですから、私が心を漉き込む和紙の名前は、私と和

国安和紙と

ともに…

東予市 杉野 和吉

紙のふるさとである「国安」でなければなりません。

「和紙」には、色々な顔があります。「楮紙」・「雁皮紙」というように原料名で呼ぶ場合、「奉書紙」・「美術紙」・「書道用紙」というように用途別に呼ぶ場合、また、「大洲和紙」・「土佐和紙」というように地名で呼ぶ場合など、時と場合により、一枚の紙に対する呼び方がこうも変わってくるの



作業中の杉野さん

です。しかし、私は「国安和紙」という呼び方にこだわり、これからもずっとこだわりたいと考えているのです。

✧和紙の私設展示館

その一つとして、平成二年に作業場を改築した際、その隣接地にちよつとした和紙の展示館を建設しました。

木造二階建の一階には、この地域の和紙に関する資料や記念品、道具や原料等を展示しております。入口の木戸は、当時の和紙工場に使われていた年代物で、手作り製品（のし袋、便箋、封筒、お菓子敷等）の陳列ケースは、漉舟（すきふね）を改良したものとなっています。

国安地区に和紙づくりが導入されたのは、天保二年（一八三二年）のこと、田中佐平翁によるものであります。田中翁は、国安手漉和紙の祖であり、田中翁に対する感謝状等もここに展示しています。そうすることで、確かな歴史を伝えていきたいと考えているのです。ワラジにはきかえ二階に上がる

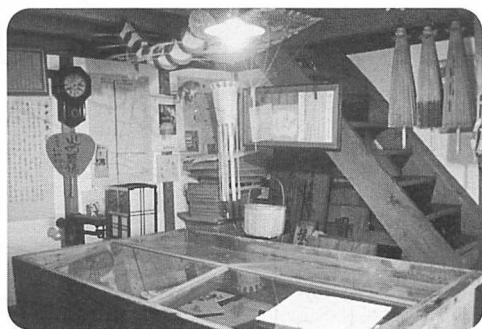


和紙に関する資料や記念品の数々

して使われた和紙を敷き、その上に和紙座布団を置き、まわりには、私の漉いた和紙を用いた著名作家の版画、水墨画を展示しています。私はここで、「和紙の良さ」とこの地域の和紙の歴史を多くのの人に見てもらい、手漉和紙を単に伝統産業に終わらせるのではなく、和紙を通して地域に関わり、生活を見直していきたい」と思っております。そして、このことは、私の一貫した姿勢でもあるわけです。

✧日本の和紙

皆さんは東予市をご存じでしょうか。「余り印象がないなあ」と



漉舟を改良した陳列ケース

いうのが、正直なところだと思えますが、ここにも日本一のものがあります。それは、檀紙、奉書紙の生産であります。結納などに使うのし袋の中で、波の付いたものが檀紙、波のないのが奉書紙ですが、この二つの生産量は、全国シェアの九割を占めており、紛れもなく日本一なのであります。

しかし、日本一であるという事実を残念ながら市民は知りません。それどころか、和紙を漉いているという事実すら、知らない市民も多いのです。

最盛期には、六十数軒を数えた

業者も、今では機械漉きに押され、六軒の業者しか残っていないことでもあります。和紙製品が地元で作られることも、売られることもなく、和紙文化が育たなかったことが一番大きな原因であると考えられます。日本一の産地にしては寂しい限りの話です。

✧和紙の手作り製品

確かに和紙は高級であり、値段が高いという感覚が根強くありますが、実際は、製品に比べ原紙は安いものなのです。それなら自分の紙を、自分で製品にし、自分で売ってみよう、そうすることで地域に関わっていいことと思い、製品づくりを始めました。

これは専ら家内の仕事ですが、製品づくりにおいては、自分が普段使っているもの、つまり、生活の中に和紙を使うということを心がけているのです。

現在、私の家では奉書一槽、檀紙一槽、美術紙二槽の仕事とあわせて、製品加工を行なっておりませんが、美術紙と製品加工は、一般消費向きであるため、安定した評

価を受けております。また、この二つを作ることににより、消費者と直接会話することができ、仕事を通して、ふれあいの輪を広げていくことができるのです。

✧終わりに

東予の夕べや東予国民休暇村での和紙の体験コーナーの実施、幼稚園児の工場見学、小学生の風・こいのぼり・七夕祭り等への和紙の提供、公民館での和紙教室など、市民の理解や関心を得るためのPRに努めております。これには、子ども達の中から、将来の担い手が現れれば、などという淡い期待もあるのです。

い」を開催し、県内外から、過去最高の二〇〇名の方が参加してくださいました。市内で、全国大会が開催されることは珍しく、産地としてのイメージアップにもなったのではないかと考えております。

これらの活動は、ゆつくりとした歩みであるかもしれませんが、一人でも多くの人が和紙の存在に気付き、生活の中で和紙を使い、それにより「ゆとり」と「ぬくもり」を感じてくれれば幸いです。国安和紙が生活文化の一つとして地域に定着していくことを願いつつ、これからも地域に関わってきたいと考えております。

その一つとして、

今年は、市内の小学校の一つで、和紙の卒業証書を自分たちの手で作りました。

来年は、その輪が広がっていくことを期待しています。

また、平成四年には、市内で、「全国手漉和紙青年の集

紙漉くや

白のはじめは

水の色

悦一



国おこしのちかい

「えひめ地域づくり研究会議の 少々早すぎる自叙伝 その1」

えひめ地域づくり研究会議

代表運営委員

守谷和久

SPRING

ある雑誌に荻野目洋子が「早すぎる自叙伝」というエッセーを執筆連載している。私はそのファンであり、彼女の歌も好きな方である。別に若者に合わせているつ

もりは毛頭なく、実際、彼女の「湾岸太陽族」なんていう歌はCDでちゃんと買って、十連奏に入れてボリウムをMAXに近くして狂ったように車を走らせたりしている。まったく自分でもあきれてるが、彼女もかわいらしい娘だし、歌もビートがあつて本当、よろしい。ただし「早すぎる自叙伝」というタイトルは好きになれないでいる。少しナマイキに聞こえるし、カッコ付け過ぎじゃないのという感じで、イヤダと思っていた。しかし、内容たるや、すごく素直で好感が持てるどころが多く、ファンになったままで現在に至っている。書き出しが洋子ちゃんになっってしまったが、別に洋子ちゃんではなくても良かったし、「ビートたけしの顔面麻痺の方がインパクトがあつて良かったかな？」と思つたりしている。

つまりは、「えひめ地域づくり研究会議の少々早すぎる自叙伝を、忘れんうちにハヨー書いとかないかん想い」というテーマにこだわつたから、洋子ちゃんに、まず登

場願つた訳である。

自治体学会という学会がある。

一九八六年五月二十三日横浜で創立総会を行い、第一回を徳島で、その後、仙台・熊本・大阪等と続いて、本年八月には長野県上田市で第九回目を迎える。創立総会から数えると十回目ということで、

「自治体学会の十年・地域自立の戦略と自治体学」といったテーマで大会が開催される予定である。自治体学会が生まれる三年前に

全国自治体政策研究交流会議というとても長くつたらしい会議がまず活動していて、これが母体となつて学会が生まれたそうである。創立当初の代表運営委員は、田村明さん、塩見譲さん、西尾勝さんの三名でした。現在、高寄昇



三さん、大森彌さん、上原恵美さんで運営に当たられており、役員は地域選出二九名、全国選出二二名、監事二名の計五十二名であり、会員一八四七名である。

皆さんご存じの田村明さんの説明によると、「自治体は、上からの命令や法律ということだけではなく、自ら政策をたてなければならぬ時代になつてきており、事実こうした政策の実践が各地で行なわれております。しかし、この政策を実践するためには“人”が必要で。そういう“人”が自信をもつて自分達の地域運営をしていくということが必要です。こうした“人”が集まつて自治体学会なるものをこしらえた」とのことです。従来からの学会との相違点は次の五つであると言われています。

- 第一は、草の根からできた。
 - 第二は、学際的である。
 - 第三は、市民性である。
 - 第四は、実践性である。
 - 第五は、地域活動が基礎。
- それぞれの地域で地域・自治・

住民について考え、それを良くしていこうというネットワークング的研究活動が、広い意味でこの自治体学会の実践的な基礎であると思われまます。すなわち、地域や自治体のことを考える方々はどなたも仲間だと思い、この学会はそういう方々に開かれているのだと。

この自治体学会の設立記念のシンポジウムが当日「自治体学会初の公式事業」として開催された。進行役は大森彌氏、パネラーのお一人に岡田文淑氏がおられ、問題提起をされました。

要旨だけ記しておきます。

「今日の自治体は、多様な課題を抱えている。同時に住民のニーズはさらに広く、そして深く、行政に求められている。『まちづくり』が政策論議の中に根づき始めたのは、その現れであろう。このような状況の中であって、自治体には少しずつ頑張りが見え始めた。『自治体学会』は、現場で生きる情報の収集と提供、そして新しい『行政』づくりのための精神的な拠りどころであって欲しい

……」と。

このようにして、十年前に自治体学会が生まれた。

「地方の時代」の提唱者である長洲一二神奈川県知事が、この設立時の主賓の一人でした。

我がえひめ地域づくり研究会議が発足したのは、一年半後の一九八七年十一月十四日でした。(内子座にて)

設立総会の半年前、久万町の国民宿舎古岩屋荘にて、全国組織「自治体学会」の県内版を作ろうと、宮本俊一前まちづくり総合センター所長、岡田文淑前自治体学会運営委員が呼びかけた。



自治体学会分科会にて

それに答えて、ハセ参じた野武士達約三〇名。その日次のような事を決めて、それぞれ県内へ散って行った。

一、約半年後二会ヲ設立スル
二、世話人ヲ決メテ

世話人代表 渡部鬼子雄
世話人副代表 宮本俊一

事務局長 岡田文淑
世話人 白石高啓
島津豊幸
若松進一
渡辺浩二
藤本一三
井上善一

以上

地域や自治体、住民、人が変化している。かなり大きな変化があったし、これから先も激変すると考える。

高齢化・国際化・情報化、そして絶え間ない競争社会に我々は追い込まれている。また、追い込んでいる張本人であるかも知れない。地域を再生するため、人を生き生きさせるために、我々が集まっ

た。

これまでのことの、ほんのスタートの時あたりを、少しだけ書かせてもらった。初心を忘れないためであり、感謝の表現でもある。

井戸を掘った人を忘れてはならない。例え、今出てる水に少しのニゴリがあろうとも、それまで水がなかったのであるから……。

これまでに、あまり固守したくはない。これまでより、これからを多く語りたい。責任世代として語る事を止めてはならない。

もう語る事を止めた仲間にも言いたい。まだまだ語りを止めてはいけない。あの時「想った」思った「オモッタ」地域になつてないじゃないの！まだまだ

つづく



私のまちづくり元年

松山東雲短期大学

福田 倫子

平成七年一月二十八日、道後にぎたつ会館で開催された「えひめ地域づくり研究会『94年次フォーラム』—二十一世紀への潮流とまちづくり—」に参加させて頂きました。当初は、大学の授業の一環として、定期試験の代わりにフォーラムに参加し、そのレポート提出をするためという、単純な理由で参加したのですが、実際フォーラムの中でお話をされた人々の経験一つひとつを知るたび、何だかとても自分の町にいろんな可能性を持てるようになりました。

中でも、一番印象に残っている言葉は、第二部の公開討論会の中で、パネラーの黒瀬久美子さんがおっしゃった「やりたいことをやる」ということです。みんなが出来る範囲で、出来ることをする、上から言われてするのは、気持ち

が悪いということです。確かに、「しなさい」と言われて「しなくちゃならない」という、強迫観念に基づいてものごとを行うのであれば、そこには、主体性というものは存在しません。私は、大学で学生会活動に携わっており、やはり先生から「しなさい」と言われて行動するときより、自分たちで「ししよう」と考えて行動するときの方がやりがいや充実感を感じるし、自分自身仕事をしていても楽しく、しんどいことも苦になりません。つまり、自分から進んでやろうと思わない限り、何かをやるうとしても、無理が出てきて、結局長続きしないし、失敗に終わるであらうということです。まちづくりをするのは、そこに住

んでいる人が、その町をより住みやすく、誇りに思える町にするためであり、住民が主体となって活動していくことが本来の姿だと思います。

フォーラムで報告された数々の地域おこしやまちづくりに携わっておられる方々の活動は、その一つひとつが地域や住民に密着していて、その特色を活かしたものが多くありました。現在、地域を支える地場産業は、若年層の都市集住化による過疎化の問題や、経営基盤が弱いため、大企業に押され気味という状況にあります。地場産業の活性化は、地域の活性化に繋がるとも言えますが、そういった、経済的活性化だけでは、本当のまちおこしにはならない、といった意見が出たフォーラムでもありました。やはり、そこに住む人々が、自分の住む町に誇りを持ち、機能的な意味合いだけではなく、精神的なゆとりを感じられるまちづくりが重要になってくるのでしよう。

今回、このフォーラムに参加で

きたことは、来年就職を控えた私にとって、自分の町を見つめ直す良い機会になったと思います。また、様々な、地域おこしに携わっておられる方々の貴重な体験談を数多く拝聴でき、勉強にもなりました。二十一世紀を担う世代の一人として、今回のフォーラムをきっかけに、私も、自分が生まれ育った松山のまちを誇りに思えるようなまちづくりに、積極的に参加していきたいと強く思っています。



松山市

野外活動センター

松山市

松山市北端の丘陵地に広がる「松山市野外活動センター」は、約四五haの敷地を持ち、野外活動の様々な楽しみ方に応じて各種の施設が用意してあります。この施設は、松山市が平成元年の市制施行百周年記念事業として着手。二年七月から一部オープンし、昨年八月に全面オープンしました。



センター内は常設テント四〇基のほかロッジ十棟・炊事棟・雨天キャンプファイヤー場があるキャンプゾーン、体育館・宿泊研修棟・管理棟があるスクールゾーン、オートキャンプ二〇区画や上級者向けのパイオニアキャンプが出来るアドベンチャーゾーンの三つに分かれており、全体で一五〇人を収容する事が出来ます。

その他長さ八六mのローラースライダー、木製のアスレチック遊具も設けてあり、日帰り利用も出来る施設です。

電話予約が出来、手続きも簡単ですので、是非一度お越し下さい。
※問い合わせ先

松山市野外活動センター

☎ 0899 (77) 2400

開館間近 北条ふるさと館

北条市

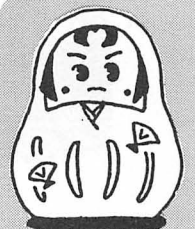
北条の平野を貫く国道一九六号線沿いに、広々とした文化の森公園があり、その一角に延床面積二七六六㎡の地域文化創造の拠点、ふるさと館が新設されました。

三階の円形展望室は、周囲総ガラス張りです。瀬戸内の島々、高縄山系の山々や眼下の田園風景はまさにパノラマであり、バロック音楽の響宴ヴィバルディの協奏曲「四季」か、陽光と緑の印象派絵画を連想させてくれます。二階には、郷土ゆかりの孤高の画家安藤義茂画道生涯の作品のほとんどを収蔵・展示する美術展示室があります。一階には、この地方の歴史、特に河野氏栄枯盛衰のロマンに引

き込まれるかのような、歴史民族資料展示室が設けられています。ここを訪れる人々に、心のふるさとを見つけていただくことができるような「ふるさと館」です。ぜひご来館ください。(四月末開館の予定です。)

※問い合わせ先 北条ふるさと館

☎ 0899 (93) 3266





歴史民族資料館と 地域活性化センター が誕生

河辺村

河辺村に村民待望の歴史民族資料館と地域活性化センターが、昨年六月にオープンしました。

一階が歴史民族資料館で、ロビー・展示室・収蔵庫があり、昭和五十四年から収集してきた資料約七二二点の内、約六〇〇点を展示しています。

特に目をひくのは、立木式木蠟製造機で明治・大正・昭和の木蠟製法を伝える貴重な資料として復元されています。

また、二階の地域活性化センタ



ーはステージ付きの大広間・和室・調理室・倉庫などを備え、北平地域の文化活動の拠点として活用されています。

この施設の近くには、県指定民族文化財「御幸の橋」という屋根付き橋もありますので、ぜひ一度お立ち寄りください。

※問い合わせ先

教育委員会社会教育課

☎ 0893 (39) 2111

さわやかに 「夕日のミュージアム」 オープン

双海町

「しずむ夕日が立ちどまる町」というキャッチフレーズが示すとおり、夕日にこだわったまちづくりを推進している双海町に、その集大成としてこの程、「夕日のミュージアム」がオープンしました。

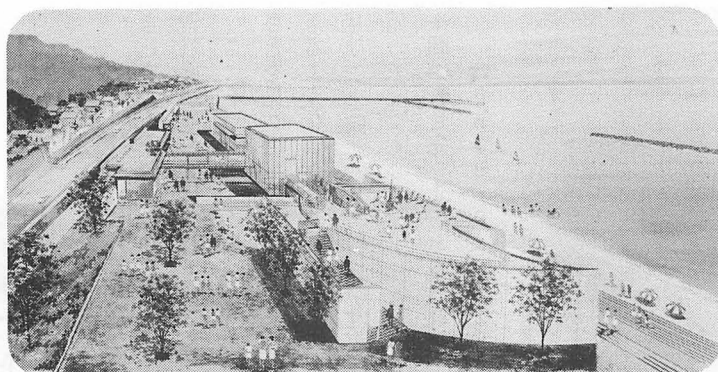
屋外にはモアイ像、ストーンヘンジが展示され、風景絵画といわれる双海町の夕日のもつ神秘さをアピールしています。展示室内の二つのコーナーでは、世界十五か国の夕日映像を始め、夕日の歌、夕日の絵画、夕日と動植物等、徹底して夕日にこだわった内容が体験学習出来ます。この他にも、世界の夕日をバックに記念撮影出来る映像処理設備や、水槽五本のミ

ニ水族館等、皆さんが楽しめる内容となっています。特産品センター、人工砂浜、広場も整備され、「道の駅」に登録されています。松山から車で四十分。是非お越し下さい。

※問い合わせ先

夕日のミュージアム

☎ 0899 (86) 0522



生涯学習の拠点 「ふれあい会館」オープン

長浜町

「開閉橋と肘川あらしのまち長浜」の「生涯学習のまちづくり」の拠点として、また、地域のコミュニケーション活動の場として「長浜町ふれあい会館」が昨年十一月にオープンしました。

概要は、鉄骨造四階建て、延床面積一九〇五㎡で、一階には町民ギャラリー、二階には一一台の調理台を備えた調理室と、三二帖の和室二室、三階には一六二の固定席を有する多目的中ホールと会議室二室、四階には最大三〇〇人が収容できる大ホールがそれぞれ整備されており、各種文化活動、会議、講演会等に幅広く利用できます。



※使用時間 午前九時～午後十時
※休館日 毎週月曜日、年末年始
国民の祝日

※問い合わせ先
長浜町ふれあい会館
☎ 0893 (52) 1210
FAX 0893 (52) 1207

かまぼこ板 第二の人生物語

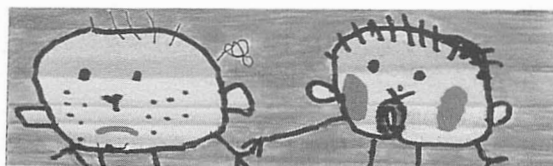
城川町

「かまぼこ板」に絵を描いてみませんか！絵は誰でも、いつでも、何にでも描けます！

この企画は、かまぼこを食したあと残った板の上に絵を描いていただき「木のぬくもり」の上に感動（心）をのせた作品を、町立美術館「ギャラリーしろかわ」に展示しようというもので、現在作品を募集中です。

テーマは自由です。とにかくかまぼこ板の上に絵を描いて下さい。一作品、板一枚一〇〇枚までOKです。学校、職場等の団体、グループ大歓迎です。

※プロ・アマは問いません。世界各国どなたでもOKです。



マジックとマーカーペンによる作品
「ぼくのおとうちゃん」

※必ず一作品ごとにかまぼこ板の裏に絵の題・住所・氏名・年齢（学生は学校名・学年）を明記。
※賞金総額一二〇万円とたくさん
の副賞・特別賞があります。
※締切り 五月十日（消印有効）
※あて先 問い合わせ先 城川町
下相六八〇「ギャラリーしろかわ」
☎ 0894 (82) 1001



平成 7 年度事業計画

(財)愛媛県まちづくり総合センター

(財)愛媛県まちづくり総合センターは、県内各地で進められている地域づくり活動の支援機関として、潤いと活力に満ちた新しい愛媛のくにづくりと21世紀の愛媛を創造していく基盤づくりのため、交流、連携、そして住民参加型のまちづくりに視点をあて、県内の各地域が進めている地域づくり活動を支援することとし、平成7年度の事業計画を次のとおり決めました。

平成 7 年度事業計画の概要

- 機関誌『舞たうん』の編集・発行
まちづくり活動の情報発信と地域づくり活動者のネットワーキング誌として、継続して発行する。
なお、誌面構成、内容の検討を行い、一層の内容充実にあつめる。【4月、7月、10月、1月発行】
- 『全国まちづくり調査』のデータベース化と情報提供
前年度までに実施した「全国まちづくり調査」をパソコンにより、データベース化し、各地域におけるまちづくり関係団体等からの照会に応じて、必要な情報を提供する等、情報提供活動の充実を図る。
- 情報収集用刊行物の整備
まちづくり関連の各種刊行物と、「まちづくりビデオ」の整備を進め、引き続きまちづくり情報の蓄積を図る。
- 新鮮かつタイムリーな情報の収集・提供
県内各地からのまちづくり情報の個別需要に対し、新鮮かつタイムリーな情報を提供する。
- 地域づくり調査研究事業の実施（新規）
県下各地の個性ある地域づくりや住民が住みたくなるまちづくりに向けて、現状把握と将来への動向について、調査研究事業を実施し、今後の地域づくり活動に役立たせる。
- イベント情報誌『えひめイベントBOX』の編集・発行
平成7年度中に県内で開催される、あらゆるジャンルのイベントを保存活用タイプの情報誌にまとめ発行する。【4月発行】
- 『地域づくり研究サロン』の開設
まちづくりに関する様々な課題や時代に即したテーマ等について、専門家の意見を交えた研究サロンを開設する。
- 『地域づくり先進地交流研修』の実施
次代を担う地域在住の若者を対象に、全国レベルの個性的かつ魅力的なまちづくり事例を研修するための先進地交流研修を企画・実施する。【9月実施】
- 『ふるさと再発見・創造塾』の共催
県事業の「ふるさと再発見・創造塾」を共催することにより、若いリーダーの育成とそのネットワークの構築を図り、個性的で魅力あるふるさとづくりを促進する。
- 『えひめ地域づくり研究会議フォーラム』の開催
えひめ地域づくり研究会議と合同で、フォーラムを開催し、地域づくりに関心を持つ人々の学習、研究活動を積極的に支援する。
- 『まちづくり研究アシスト事業』の実施
まちづくり研究グループ等が実施する学習・研究活動並びに広域的なまちづくりイベント等の開催を支援し、ひとが育つ環境づくりを進める。

「全国まちづくり情報」について

(財) 愛媛県まちづくり総合センター

当センターでは、まちづくりに関する情報機能の充実を図るため、平成5年度及び6年度において全国3,259区市町村を対象に「全国まちづくり調査」を実施した結果、1,656区市町村よりご回答をいただくと共に、一部、貴重なまちづくり資料（振興計画、要覧等）のご提供をいただきました。

ご協力をいただきました各区市町村の方々に厚くお礼申し上げます。

この情報は、パソコンに入力してデータベース化し、各地域のまちづくり関係機関団体等からの照会に応じて、必要な情報をご提供できるよう整理加工をしております。情報の内容等については、以下のとおりです。

◆ 情報の内容（全国1,656区市町村）

1. まちづくりのキャッチフレーズ
2. 重点的に取り組んでいるまちづくりのジャンル（1区市町村3ジャンル以内）

及びその概要

【ジャンル区分】

- | | | | |
|-----------|-----------|--------|--------|
| ①地域間交流 | ②国際交流 | ③特産品開発 | ④芸術文化 |
| ⑤イベント | ⑥歴史・伝統・文化 | ⑦景観整備 | ⑧健康・福祉 |
| ⑨コミュニティ活動 | ⑩その他 | | |

3. まちづくりの拠点施設やグループ活動等誇りとする事例

◆ 情報の活用方法

以下のような照会に対して、必要な情報をご提供します。

【事例 ①】

当町では、現在国際交流に取り組んでいます。参考にしたいので、アメリカの自治体と姉妹都市提携を結び、中学生のホームステイに取り組んでいる近畿地方（できれば〇〇〇県）の市町村を紹介してください。

また、その中で国際交流協会を設置し、海外派遣等の対象者に対して、基金を財源に補助している市町村があればお願いします。

【事例 ②】

当町では、「花」（具体的な花の名前でも可）を題材としたまちづくりを検討しています。ジャンルは問いませんので事例があれば紹介してください。全国どこでも結構です。

◆ 照会先

(財) 愛媛県まちづくり総合センター

〒790 愛媛県松山市三番町8丁目234番地

愛媛県生活保健ビル 3F

☎ (0899) 32-7750

FAX (0899) 32-7760

（財）愛媛県まちづくり総合センター

人 事 消 息

■平成7年度 センター職員（◆印は新しいスタッフです）

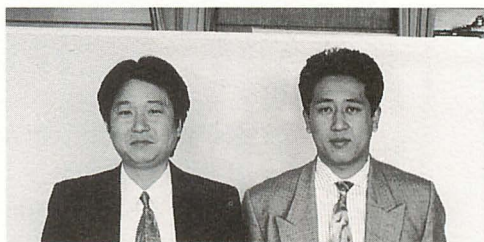


◆研 究 員
大谷 基文
(双海町)

◆研 究 員
酒井 康次
(野村町)

(前列左から)	事 務 員	川原 千明	所 長	渡邊 智	事 務 員	中路由加理
(後列左から)	主任研究員	中村 博之	研 究 員	酒井 康次	研 究 員	大谷 基文
	研 究 員	藤田 良	研 究 員	竹松 毅		

※4月1日付けで、研究員として勤務された2名の活動の拠点が変りました。これからよろしくお願いいたします。



松川 伸二
(野 村 町)

尾崎 弘典
(一本松町)

（財）愛媛県市町村振興協会

（財）愛媛県まちづくり
総合センター

発行／平成七年四月十五日

TEL 0899(32)7750
FAX 0899(32)7760

愛媛県生活保健ビル三階
（財）愛媛県まちづくり
総合センター

二人のMS・（中路・川原）まで
〒790 松山市三番町八丁目
二三四番地

内容についてのご意見や活動
内容についての記事など、お気
軽にお寄せください。
「舞たうん」編集係

ふと目を開けると……。
ブラインドからこぼれる光は
もう春そのもので、冬の間かた
く閉ざしていた蕾も先を競って
開こうとしているようです。
思いきり窓を開ければ、そこ
はパステルの色、色、色。
なんとなく優しい気持ちにな
れそう、そんなこの頃なので
す。